

(2) 国内の創造都市・創造農村の動向

創造都市ネットワーク日本（CCNJ）は設立後1年を経過して、33自治体、その他13団体まで参加団体が増加している。ここでは、幹事自治体以外の自治体の特徴的な動きを取り上げておこう。

1) 「高松市創造都市推進ビジョン」

高松市では、大西秀人市長のリーダーシップのもと、2012年4月に創造都市推進局が立ち上がり、創造都市推進条例によって審議会が設置されて、1年がかりで本格的な「高松市創造都市推進ビジョン」づくりを行ってきた。

ビジョンづくりの推進体制として、創造都市推進審議会を設置して、有識者や市民の意見を集めるのみならず、審議会の下に40歳以下の市民による「高松市創造都市推進懇談会（U-40）」を設置しているのが注目される。現場で活動している若手の柔軟な発想を提案に活かそうという試みであり、U-40の若い人たちがざっくばらんにアイデアを出し合うような体制で議論を深めてきた。

人口42万人の高松市では、少子高齢化が進み、2050年には10万人ほど減少して31万2000人までになるという将来推計の中でも、持続可能なまちとしての希望の灯りが見えるようにと、灯台の灯りがまちを照らすようなロゴマークをつくった。



次に、高松らしい創造都市とは何かを討論する中で、高松市の特徴を、四国の中枢拠点都市であり、インフラが集積した都市的な利便性のある一方で、瀬戸内海の美しい海と四国の穏やかな自然や山なみがある潤いのある田園都市であり、その中で市民が芸術文化の活動を花開かせて、街全体が元気になり持続可能性のあるまちとして発展していくイメージを絵にすることによって、具体的に何をやるかを市民に示している。ここには大西市長が打ち出した「創造性豊かな海園、田園、人間都市の実現」というイメージが重なっている。

創造都市の核となるのは、創造的な市民の活動である文化芸術、工芸、伝統芸能あるいはスポーツである

が、これらから派生してまち全体を元気にしていこうと、創造的な文化芸術、伝統芸能、スポーツ、工芸等を、商工業の振興、まちづくり、農林水産業の振興、観光の振興等に広げることによって、魅力あふれ活力ある創造都市にしようというイメージを描き、その推進方向として、独創指向、世界指向、未来指向の3つの戦略を進めることを打ち出している。

高松らしさを発信するためには地域だけを見るのではなく、世界全体を見てグローバルに開く考え方でなければならず、将来を見通した「独創・世界・未来指向」で、文化芸術の持つ力を街全体の活力に繋げる創造都市を進めていこうという戦略を基本に据えている。

このビジョンの基本的な考え方に基づいて、6つの分野でプロジェクトを配置している。

具体的には、「交流空間」「食」「生活工芸」「祝祭」「国際会議」、それから「こども」という6つの分野で括り、創造都市を実現するためのプロジェクトとして43の事業を掲げている。例えば、「交流空間」では、市内中心部でこどもの数が減って統合された小学校－高松出身の文豪・菊池寛の出身校である四番丁小学校が他の二つの小学校と統合されて新番町小学校に移った一跡地を活用して創造支援センターという、新産業を創る起業を支援する小さなオフィス、インキュベータールームを設置した。そこに埋蔵文化財センターと、NPOの市民活動センター、地域のコミュニティセンターとを同居させることによって、地域住民と一緒に新たな創造的な産業も含めた起業を支援していこうとしている。

「生活工芸」の分野では、2012年に開催した「瀬戸内生活工芸祭」－高松を代表する工芸である漆器、石材のほか、盆栽などといった伝統的な工芸を集めて展示する－を2014年には、高松の作品のみならず、全国から集めて展示開催する予定である。

「祝祭」の分野では、今や海外からの評価も高く、2010年と2013年の2度の開催を成功させた瀬戸内国際芸術祭をトリエンナーレとして継続開催する。高度経済成長の陰で、コンビナート開発や産業廃棄物の投棄で汚された瀬戸内海と島々の環境と景観をアートの力で甦らそうという壮大な実験であり、期間中に国内外からの30万人を超える訪問者に地域は大きなインパクトを与えている。世界中から駆け付けたアーティストとの共同の作品制作によって眠っていた地域の記憶が再生され、来訪者との交流の中で住民たちは自信を回復し、「空洞化しつつあった誇りを回復させる」ことにつながっている。こうした中で、島を離れていた家族が帰還を決意することによって閉校中の小中学校を再開する運びになったと、開催地の一つである高松市男木島から報告されている。

「国際会議」としては2014年に、日仏の自治体交流会議を開催する予定である。第1回は2008年にフラ



ンスのナンシー市で、第2回は2010年に日本の金沢市で、第3回は2012年にフランスのシャルトル市でというように2年おきに日仏交互に開催されてきた。次回の第4回は2014年に高松で開催される。

6分野の中で特徴的なものとしては、「こども」の分野が挙げられる。将来を担うこどもたちが、高松で創造的な活動をして大きく明るく育ってゆき、それがまちの活性化につながるという視点から、こどもに関する事業を創造都市のプロジェクトに入れている。これからの高松を担うこどもたちを地域全体で育むことで、創造性を発揮できるこどもに育てていき、これによってまちの将来の明るさ、活気をもたらされるという考え方で、具体的な取り組み事業として、「芸術士派遣事業」「地域密着型トップスポーツチームの活用」「ものづくりふれあい教室事業」を掲げている。

芸術士派遣事業とは、高松市の独自事業で高松オリジナルの取り組みであり、「芸術士」を保育所やこども園、幼稚園などに派遣するものである。さまざまな分野の芸術家や若い芸術家の卵や、絵や彫刻、デザインといった分野で芸術的な才能を発揮する表現者、作家たちを、NPO法人アーキペラゴ（三井文博代表）を通じて保育所などに派遣して、こども達の芸術的センスを育むという事業である。

さらに、「もっともっと創造プロジェクト」という分野を設定し、新規事業として「瀬戸内メディアアート祭」の開催や、サテライトオフィスを山間部・島嶼部に誘致する事業もビジョンの中に取り込んで、文化芸術の力で高松全体を活性化していこうという取組みを始めている。

また、ビジョンづくりと並行して、「紺屋町カフェ」という社会実験的プロジェクトも動かしてきた。高松市美術館で使われずにいたスペースを活用して、「U-40」の人たちのアイデアで漆器や庵治石などの高松独自の工芸品を展示販売するのとセットで、若い人たちがいろいろなテーマでトークするカフェを復活させようというプロジェクトである。

2013年9月25日には、この高松市美術館を会場に日本ファッション協会主催の「生活文化創造都市高松会議」が開催されて、近藤誠一・前文化庁長官の記念講演ののち、「創造性と都市の魅力づくり」をテーマとするパネルディスカッションが開催され、これに合わせて、「紺屋町カフェ」が臨時に開かれて「創造の場」づくりに貢献した。

2) 『創造農村—過疎をクリエイティブに生きる』の出版

創造農村の動向として注目されるのは、2013年夏に木曾町で開催された第3回創造農村ワークショップ(WS)の盛り上がりの中で、その背景となった考え方や新しいコンセプトなどを盛り込んだ書物が関係者の熱意によってまとめられ、『創造農村—過疎をクリエイティブに生きる』が刊行されたことであろう。ここでは、主催地の木曾町の他、第2回の開催地である篠山市、さらに、手づくりのビエンナーレで注目される中之条町、そして、「創造的過疎」の実践でマスコミから注視される神山町のリーダーによる実践と熱いメッセージも掲載されており、以上の4地域の他、第1回創造農村WS開催地である仙北市、ユネスコ創造都市ネットワークにガストロノミー分野での登録をめざす鶴岡市、「創造的過疎」を掲げてサテライトオフィスの集積が進む神山町、瀬戸内国際芸術祭を追い風にアートによる島の再生をめざす直島と小豆島、三線と工芸を活かしたまちづくりが進む読谷村など、多様な取り組みが紹介されており、過疎地域における創造的地域づくりへの励ましになるものと思われる。

第4回創造農村ワークショップは北海道の東川町で2014年8月に開催されることも決まり、全国の農山漁村にまでCCNJが広がりを見せることで、「文化立国中期プラン」に掲示されている、170自治体のCCNJへの参加も実現に近づくであろう。